始まりの景色

若狭陽太

湿ったくるみで包まれる
パンタグラフを伝う電流を知らず
それでも欠伸と共に飲み込まれた空間の中に
目的地に着くまで以外の意味を求めている
早く着いたって別にすることもないけど
眠っている間に到着するのは勿体ないものだ

閉まる扉が有限を告げ
手段が生んだ有閑を捏ねて
手持ちぶさたに
昔のことを思い出してみたり
ポケポケでカードをしばいたり
好きだったバンドの曲を聴いたり
座席にはまだ前の人の温もり
握り直すプラスチックを繋ぐ革
窓にはただ縁のないビルが流れるばかり

途中で降りる人もあった
またねと手を振り背中を見送って
その他の大勢に紛れてやっと
思い出の影でアルバムを作る
寂しさを告白し合うことに慣れてから
寂しさでは孤独を表せなくなった
すれ違う蛇がとぐろになって